ティーチング・ポートフォリオ

日本国際学園大学 経営情報学部 ビジネスデザイン学科

古家 晴美

日本国際学園大学
JAPAN INTERNATIONAL UNIVERSITY

内容

教育の責任 1

1. 何を担当しているのか 1

教育の理念 2

1. 身近な環境、異質な文化・価値観にも好奇心・理解を持てる学生の育成 2
2. 新たな知識を得た驚きとよろこびを感じ取れることを目標とした授業 2
3. アクティブラーニングを取り入れた地元茨城を海外に対して表現する教育 2
4. 多様性を理解し、協働する教育 2

教育の方法 3

1. フィールドワークを取り入れた授業 3
2. フィールドワークにおける体験談がもたらす驚きと命の重さ 3
3. 地元茨城を意識した授業 4
4. コメと日本文化の関係に関する授業 4
5. 筑波技術大学との合同授業 5

教育の成果 および 今後の目標 6

参考資料 7

教育の責任

1. 何を担当しているのか

本学で担当しているのは、食および生活のあり方を通してみた日本文化および地域文化の理解と、それをいかにして留学生や外国人にも伝えるか、また異文化との比較の中で相対化して、どのように理解できるかについて考察することである。

食を通して見た社会と文化の理解

日本人の生活文化

地域文化理解

担当科目

科目名	対象学年	受講人数※	授業形態	必修選択	科目区分（カリキュラムにおける位置づけ）
多文化共同演習	2		講・実	必修	
文化の考え方	2	7	講義	選択	
人文科学特論 B	2	4	講・実	選択	
地域研究 A	3	9	講・演	選択	
地域研究 C	3	4	講・演	選択	
専門演習ゼミ2	4	4	演習	選択	
卒業研究	4	1	演習	選・必	
ロジカルシンキング		17	講・実	選択	
サービスラーニング演習 A	3	1	講・実	選・必	
サービスラーニング演習 B	3	1	講・実	選・必	

※受講人数は過去の実績による平均受講人数

教育の理念

1. 身近な環境、異質な文化・価値観にも好奇心・理解を持てる学生の育成

社会全般に自分とは異なる環境の価値観や文化への理解や好奇心が停滞している傾向にあることを切実に感じている。本学で教職について 25 年を超えるが、学生の間でも自分の周囲の環境に対しては非常に敏感であるが、一部の者を除き、自分の生まれ育った地域の過去、異なった世代への理解、異文化への理解や対する知的好奇心が薄れつつある。積極的に周囲の文化や生活環境、食生活にも好奇心や理解を持てる学生を育成したいと希望している。

2. 新たな知識を得た驚きとよろこびを感じ取れることを目標とした授業

毎回の授業で、新たな知識を得ることの驚きとよろこびを感じ取れる授業を行うことが目標である。身近な問題を解説しながら、自分自身の文化への理解を深めていく。特に、文化についての概論（「文化の考え方」）では、初回に、高校まででは聞いたことがないであろう生の体験談をぶつけ、大学に入学したことを実感できるような仕掛けを用いている

3. アクティブラーニングを取り入れた地元茨城を海外に対して表現する教育

2019 年度から「茨城を知る」と言う副題で、基礎科目に茨城の自然・地形・地理・交通・産業・歴史・文化・景観などを多角的に紹介した講座を開設した。本学の場合、日本人学生の半数以上が、地元茨城の出身であると同時に、卒業後、茨城県内に就職を希望する学生が多い。どの分野に就職するとしても、地元と強い連携を持ってきた本学としては、学生に最低限、茨城についての基礎知識を身に着けてから社会に送り出したいと考えている。

また、県内に目を向けるだけでなく、この国際化の時代、それを海外に対してどのようにアピールしていくかについても考える機会を与えてみたい。アクティブラーニングの中で、自主的に問題点を発見し、それをどのような形で解決していくか、チームワークとしてどのように遂行していくかなどについても、教育プログラムの中に積極的に取り込みたい。

4. 多様性を理解し、協働する教育

近年、ダイバーシティ（多様性）の問題が、しばしば注目されるが、具体的に相互の違いを理解し、協働する実践の機会を限られている。本学では、地域貢献を目的とするサービスラーニング演習の授業で、2021 年度から筑波技術大学との合同授業を行っている。筑波技術大学は身体障碍者の学生から構成される唯一の国立大学である。

聾唖の障碍を持つ学生と共に地域貢献に取り組み、「心のバリアフリー」を目指している。物質的なバリアフリー以外に障碍者に対してどのような心遣いが必要か、彼らが何を求めているかについても、同世代ならではの相互理解の中で学び取る機会を提供したい。

教育の方法

1. フィールドワークを取り入れた授業

2025.6.2 両墓制についてのフィールドワーク

考古学が発掘資料、歴史学が文書資料に基づき、研究を進めるのに対し、民俗学は聞き書き調査（フィールドワーク）によって収集した資料を用いることを前提とする。「民俗」は生身の人間から聞き出した様々な生活習慣や社会組織、信仰、口承文芸などを研究対象とし、それが地域や時代などの文化的背景により大きく異なってくるからだ。一部の積極的な学生を除くと、本学の学生は素直でおとなしく受け身型が多いと感じる。しかし、一見、物静かに見えていた学生がひとたび、フィールドワークに馴染むと、別人のようになる。積極的に相手に話しかけ、質問し、自分のことも話すという場面に何度か遭遇し、非常に驚かされた。学生の潜在的可能性を実感したと言っても過言ではない。（成果に学生レポートを挙げておいた。）

フィールドワークから彼らは多くのことを学ぶ。まず、目的地までどのような交通手段を用いて、集合時間までに間に合うようにするか、自分たちでタイムテーブルを作成する。自分で話し相手を探さねばならない。また、質問したいことを周到に準備しておかねばならない。しかし、複数回、調査を重ねた学生は、しばらくすると、用意した項目を一方的に機関銃のように質問し続ける、と相手眉をひそめていることに気づく。相手の話の流れに乗って耳を傾けながら、その合間に聞くべきことを尋ねるようになってくる。相手の話に引きずられそうな場合には、時には自分が目的としていたトピックに話が戻るよう軌道修正せねばならない。ようやく聞き終わると、録音した話のテープ起こしが待っている。その後、レポートにまとめ、クラスメートの前でプレゼンテーションを行う。また、話を伺った方にお礼状を書くことを忘れないように、教員からくぎを刺される。など、フィールドワークは社会に出てから必要なことがほぼ網羅されていると言える。

民俗学は語学やパソコンなどに比べて、実学的要素が少ないことは確かだが、人とのコミュニケーションの基本を学ぶという点においては、かなり多くのものを身に着けることができると考えている。

2. フィールドワークにおける体験談がもたらす驚きと命の重さ

最初の講義では、学生たちがこれまでは、テレビや動画などの映像を通してしか見たことのなかったであろう異文化における驚きについて、教員の体験談を話すことにしている。動画を使うわけではないが、内容が多少、（特に葬儀をめぐる調査）ショッキングなせいか、様々な反応がある。しかし、これが単なるカルチャーショックに終始せず、人類に通底するより深い問題として受け止められ

るように、問題を投げかける。命と人間の距離が遠くなっている現代日本社会において、「死」について考え直す機会として位置づけたかったからだ。また、昭和 50 年代に火葬が進む以前の日本社会との共通点を説明すると、その驚きは一層強まるようだった。

3. 地元茨城を意識した授業

千葉氏から縄文時代の貝塚と、その形状と土壌が現在どのように変化しているかについて説明を受けている学生たち。

最近の学生は、virtual realiy（仮想現実）で満足し、それを現実として受け止めることが多いように感じている。実際に人や物に触れることによって生み出される多角的な現実世界について認識を深めることができるように、実習を取り入れながら、特に外部へのアピールの弱さが、しばしばメディアでも取り上げられている地元茨城を意識した内容の授業を積極的に取り入れてきた。

２０１９年度から地元、霞ヶ浦歴史博物館の学芸員である千葉隆司氏（現　同館長）の協力を得て、茨城の地形・地質・自然・地理・農業・漁業・工業・交通・流通・歴史・景観など多角的に講義をしていただき、学生にも地元企業へのインタビュー調査とそのプレゼンテーションを課している。

また、その一環として、筑波山から霞ヶ浦へバスで移動しながら、地質や地形を実際に見学し、それが現在の産業（例えばブランド米の栽培、果樹園経営やレンコン栽培など）とどのように関わっているかについての理解を深めた。

これまでに下記のテーマで茨城についての理解を深めてきた。

茨城の自然史

茨城の風土と産業

茨城の食と農に貢献した人々

食をめぐる伝説・信仰・祭

食に関する特色ある景観

世界に開かれた攻めの茨城の食

茨城の稲作と儀礼

茨城の漁業と魚食文化

霞ヶ浦の漁業の歴史と文化

魚の流通・経済と魚を利用した商品経済

茨城の歴史と文化

水戸街道を学ぶ

茨城の祭り

4. コメと日本文化の関係に関する授業

昨年から異常気象に端を発する米の価格暴騰が全国的に注目されている。コメ不足で半ばパニック状態に陥ったニュースは記憶に新しい。コメの消費自体は、戦後、右肩下がりになっているにも拘らず、コメが日本人にとっていかに重要な食物であるかを痛感した学生も多い。飽食の時代、食の選択肢が急増した現代社会において、日本人がコメとどのように関わってきたかについて、改めて確認しておく必要がある。稲作の歴史と共に、それが天皇制や幕藩体制と深く関り、歴史的・民俗的・儀

礼的にも影響を及ぼした。また、食糧管理法など、政策的にどのような形で保護されてきたかについても知る必要性がある。一方、実際に田に入り、泥の感触を実際に感じながら、田植えを行った。このような事実を知ったうえで、改めて今後の稲作がどのような方向性を持ち進むべきかについての議論を進める。

学生たちの田植えの様子

5. 筑波技術大学との合同授業

筑波技術大学との合同授業では、春学期には、「つくば市が抱える問題」について全学生がプレゼンテーションを行い、その後のディスカッションにより、さらに深掘りすべきテーマを指摘する。第２回目のプレゼンテーションでは、その深掘りテーマのプレゼンテーションを行い、ディスカッションをするというサイクルで授業を進行している。コミュニケーションには、手話通訳２名とパワーポイント字幕、筆談など様々な手段があることを改めて知った。
活発な議論が交わされ、学生からもまた、技大の教員からも非常に高い評価を得ている。

筑波技術大学との合同授業の様子

教育の成果 および 今後の目標

詳細は「授業改善報告書」を参照。

学外授業に注力している。つくば市内で２か所、かすみがうら市内で１か所の村落部でフィールドワークを実施した。伝統的村落における祭事が、どのように変化し、また、何が「伝統」として生き残るか、それはどうしてか、と言う問題から、現代社会を生きる「人間とは何か」と言う問題を投げかけ、調査結果をレポートにまとめ、発表、ディスカッションさせた。

学生たちは、専門知識を身に付けると同時に、自分で実際に見たものを自分自身の言葉で表現すると言う貴重な機会を得たと考える。異文化とは海外の文化ばかりではない。地域の異文化も、彼らにカルチャーショックを与え得る。

グローバルで持続可能な社会を目指す現代において、実は身近（地域）に多くの存在する異文化を看過することはできない。実際に、ムラ社会を歩いた学生は、そのような異文化、未知の文化を自分の目で発見している。その中にそれまでに自分の世界には認められなかった価値観を見出し、それを理解しようと努めている。

グローバルでローカルな複眼的視点で社会をとらえ、自ら情報を発信していくことは「自他共栄」の社会を築く基盤になることであろう。社会に対する将来的なビジョンを持つと同時に、自らがその中でどのように活躍していくかのイメージを描くことができたのではなかろうか。

視聴覚教材・話し方・説明・アドバイス・評価方法・質疑応答・学生の参加・私語の対処・授業の改善・分野への興味・為になる知識取得など多項目にわたり、学生の評価が高かった。

✓　その他，担当した学生の成果物（作品や発表の様子等）や教育に関する受賞歴があれば記載

２０１９年２月「八千代町の未来を創るアイデアコンテスト」で３位に入賞。

参考資料

授業改善報告書（部外秘）

Google Classroom（部外秘）

授業で使用した Powerpoint（部外秘）